【原著】

学力試験の科目数，小論文，及び面接から見た近年の大学入学者選抜の動向

小谷野仁，繁桝算男（大学入試センター入学者選抜研究機構）

本稿では，1991 年度から 2011 年度までの 21 年間の全国大学の入学者選抜方式の推移を把握する目的で，1991，1996，2001，2006，及び 2011 年度についての全数調査からのデータに基づき，公表された定員をベースに，センター試験と個別学力試験の科目数の推移，小論文と面接の利用状況の推移，及び非学力型選抜の動向を国立，公立，及び私立に分けてまとめ，それぞれの特徴を示した。

1 はじめに

本稿では， 1991 年度から 2011 年度までの 21 年間に全国大学の入学者選抜方式がどのように推移して来たのか，また現状はどのようなのかを定量的に調べる。本稿の調査は，大学入学者選抜における一連の手続きを意思決定システムと見なすという視点から，入学者選抜で必要とされることを明らかにし，入試をより良くするために望まれることをスタンダードとしてまとめることを目指した，大学入試センター入学者選抜研究機構における入試スタンダード・プロジェクトの基礎研究として行われた。その基礎研究は， 1991 年度から 2011 年度までの 21 年間を 5 年間隔に分け， 1991 ， 1996 ， 2001 ， 2006 ，及び 2011 年度について全数調査を行って，（ｉ）センター試験の科目数の推移，（ii）個別学力試験の科目数の推移，（iii）小論文と面接の利用状況の推移，及び（iv）非学力型選抜の動向を，大学を（ａ）国立大学法人（以下国立），公立大学法人（以下公立），及び私立に分けて，また（ｂ）選抜の性質で更にいくつかのグループに分けて定量的に明らかにすることを目的としており，本稿では，これらのうち（ｉ）から（iv）の（ａ）に関する結果がまとめられている。

大学の入学者選抜方式の歴史的な推移や変容を主題とした研究は，これまで主に教育社会学の領域で様々な視点からなされてきた。経時的なデータに基づいた近年の実証的な研究としては，例えば，推薦入学の拡大に注目して，マス選抜の部分で選抜方式がより多様化している傾向があることを実証した中村（ 1997 ），国公立大学を中心に，大学または学部を単位として，入学者選抜方式のいくつかの側面についてのデータをまとめた野家（ 2000 ）， 1994 年度から 2005 年度までの総合試験と適性試験の利用状況を分析し，例えば国立大学では総合試験は前期と後期のうち後期試験で実施される傾向があること等を述べている伊藤（ 2007 ）などがある。著者等の知る限り，定員をベースとしたデータに基づく研究は少ないが，私立大学の推薦入学の割合の推移を考察した西井（ 2007 ）がある。

1 時点のデータに基づくものでは，例えば，滝（ 2000 ）が多様化を軸に 1999 年度の入試を簡潔に要約している。より最近のものでは，国公私立大学の一般入試，推薦入試，及び AO 入試の全般に渡って多様化の実態を分析した山村（ 2009 ）が挙げられる。

これらの研究と比較して，本調査の特徴は，国公私立大学の全てに対して，大学が公表した入学者選抜で選抜方式と定員が明確なものについて，原則として全数調査を行って得たデータを用い、大学や学部を単位とはせずに，定員をベースとして分析したこと，より数量的な接近法をとって経時的な推移を調べたことである。但し，本研究は公表された定員に基づく調査であり，実際の入学者数とは異なることに注意する必要がある。

2 調査の概要

全国大学の入学者選抜方式の推移を把握するために，晶文社出版編集部（ 1990 ， 1995 ， 2000， 2005）と晶文社学校案内編集部（ 2010 ）から，次の（ i ）から（ix）のデータを収集した。（ i ）選抜方式名，（ii）定員，（iii）センター試験の科目数，（iv）個別学力試験の科目数，（ v ）総合問題の有無，（vi）小論文の有無，（ vii ）面接の有無，（ viii ）書類の有無，及び（ix）その他。センター試験と個別学力試験については，教科数ではなく，科目数を調査対象としている。 データの様式は，表1に模式的に示されている。表の中の「セ科目」と「個別科目」は，それぞれセンター試験と個別学力試験の科目数を表している。また，総合問題，小論文，面接，及び書類の欄の「1」はそれらが課されることを，「0」は課されないことを示している。前節で述べたように，調査の対象は選抜方式と定員が明

表1 選抜方式のデータの整理の形式

学部	方式名	定員	セ科目	個別科目	総合問題	小論文	面接	書類	その他
法学部	前期	100	7	5	0	0	0	0	0
	後期	70	0	3	1	0	0	0	0
	セ利用A	50	3	0	0	0	0	0	0
	セ利用B	30	3	0	0	0	0	0	0
	推薦	50	0	0	0	1	1	1	0
経済学部	Ⅰ期	120	0	3	0	0	0	0	0
	Ⅱ期	50	0	2	0	0	0	0	時事教養試験
	Ⅲ期	30	0	2	0	1	0	0	0
	セ利用	30	3	0	0	0	0	0	0
	AO	20	0	0	0	0	1	1	応用力試験
理工学部	Ⅰ期	100	0	3	0	0	0	0	0
	Ⅱ期	50	0	3	0	0	0	0	0
	推薦	30	0	0	0	0	1	1	基礎学力試験
	AO	20	0	0	0	0	1	1	課題レポート

確なものに限られており，そうでないものは含まれていないが，定員の総数，選抜方式の総数，１つの選抜方式が選抜する学生数の平均はそれぞれ，1991 年度において 406450，5680，71.5581，1996 年において 486919，8551，56.9429，2001 年度において 524615，11007，47.6619，2006 年度において 485781，18764，25.8890，2011 年度において 444120，19730，22.5099 である。

3 調査の結果

今回は，大学を国立，公立，及び私立に分けた上で，（1）センター試験の科目数が０，…，４と５以上によって選抜される定員の全定員に占める割合，（2）個別学力試験の科目数が０，…，４と５以上によって選抜される定員の全定員に占める割合，及び（3）小論文と面接を課す選抜方式と，センター試験の科目数と個別学力試験の科目数が共に０である選抜方式の定員の全定員に占める割合を調べた。５教科以上の学力試験が課される選抜は少数であるため，ここでは一括りに集計した。

3.1 センター試験

センター試験の科目数に関する結果が，図１から３に示されている。まず，国立大学においてセンター試験が５科目以上課される方式によって選抜される定員の国立大学の全定員に占める割合は，1991 年度が 85.51% で最も高く，1996 年度に 70.44% と大幅に減少した後，2006 年度まで70%前後の水準で推移し，2011 年度に 83.20%まで回復した。一方で，センター試験が課されない選抜が，1991 年度から 2011 年度まで，わずかずつではあるが一貫して上昇している。

1991 年度には3.08%であったが，2001 年度に 10.45% まで大幅に上昇し，2011 年度には 13.01% にまでなっている。残りの科目数のうち，１科目と２科目はほとんどの年度において 1% 以下の水準で，３科目は 5% 前後の水準で安定的に推移しているが，4 科目は 1991 年度の7.33%から 1996 年度の 13.15% まで上昇した後、低下し続け，2011 年度には1.41%にまでなっている。

1991 年度から 2011 年度までの公立大学のセンター試験の科目数の推移は，国立大学と似た特徴を示している。５科目以上課される選抜は，1991 年度が 55.12% で最も高く，1996 年度に 28.08% と大幅に減少した後，2006 年度まで30%前後の水準で推移し，2011年度に 49.12% まで回復した。また，1991 年度から 2011 年度まで，センター試験が課されない選抜が，わずかずつではあるが一貫して上昇している。1991 年度には9.64%であったが，2001 年度に 20.06% まで大幅に上昇し，2011 年度には 21.29% にまでなっている。残りの科目数のうち，１科目と２科目はほとんどの年度において 5% 以下の水準で，４科目は15%前後の水準で安定的に推移しているが，3 科目は 1991 年度から 2001 年度までの 10 年間に 20.26% から 28.01% に上昇して，2011 年度に再び 14.99% まで低下するという，比較的大幅な変動を示している。

私立大学の定員の総数のうち，センター試験が課されない方式で選抜される定員の割合は，1991 年度には 99.88% であったが，2001 年度には 94.85% に，更に 2011 年度には 88.03% にまで減少している。2001 年度においては，私立大学の定員の総数のうち，２科目が課される選抜の定員が1.69%，３科目が2.64%であって，5 科目以上は 0.13%であるが，10 年後の 2011 年度においては，２科目が3.40%，３科目が4.65%，５科目以上は1.39%となっており，微増傾向にある。

3.2 個別学力試験

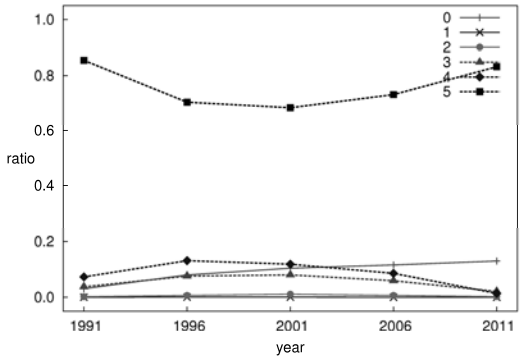

図1 センター試験の科目数の推移（国立）

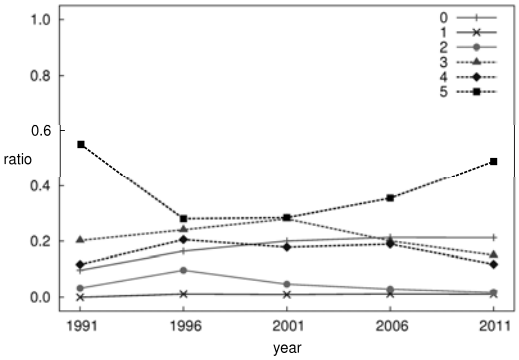

図2 センター試験の科目数の推移（公立）

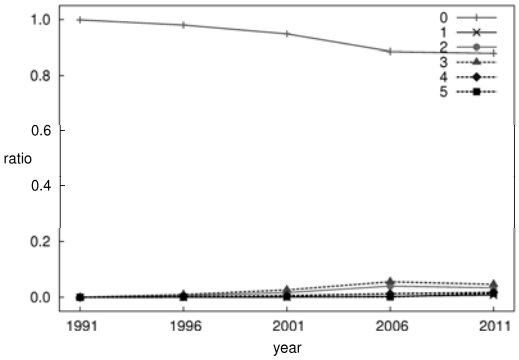

図3 センター試験の科目数の推移（私立）

個別学力試験の科目数に関する結果が，図4から6に示されている。まず，国立大学において個別学力試験が0科目である選抜の定員の国立大学の全定員に占める割合は，1991年度には16.96%であったが，1996年度の28.55%を経て，2001年度には34.20%まで大幅に上昇し，その後2006年度までほぼ同じ水準で推移した。しかし，2011年度に14.14%まで大幅に低下して，1991年度の水準も下回っている。次に，1科目と2科目は，1991年度から2006年度まで緩やかに減少した後、横ばいあるいは増加の傾向に転じている。3科目は，1991年度から2006年度までは20%前後の水準で推移していたが，2011年度に13.24%となり，目立つ減少を示した。4科目と5科目以上の選抜の割合は，特に2006年度以降微増傾向にある。4科目の選抜は，1991年度から2006年度までの16年間は5%前後の水準で安定的に推移して来たが，2011年度に14.32%と大きく上昇した。また，5科目以上が課される選抜は，2011年度には全体の約7%となっている。図には明示されていないが，個別に調べてみると，医学部が多いことが分かる。

センター試験の科目数と同様に，公立大学の個別学力試験の科目数の推移も，国立大学と似た特徴を示している。個別学力試験が0科目である選抜は，1991年度には20.39%であったが，1996年度の32.06%，2001年度の48.35%を経て，2006年度には53.45%の水準にまで上昇した。しかし，2011年度に21.68%まで大幅に低下し，1991年度に近い水準に戻っている。1科目と2科目は，1991年度から2006年度までは緩やかに低下する挙動を示していたが，2006年度から2011年度までの5年間に大きく上昇し，これらが0科目の大幅な低下分を吸収している。また，4科目と5科目以上の選抜も，国立大学と同様，特に2006年度以降微増傾向にあり，2011年度において4科目は6.73%，5科目以上は3.46%になっている。5科目以上を課しているのは，やはり医学系の学部が主である。

最後に，私立大学の個別学力試験の科目数について見る。1991年度には，3科目の選抜の定員が私立大学の定員の総数の69.40%

を占めており，圧倒的であったが， 1996 年度に 52.44% ， 2001 年度に 45.44% ，更に 2006 年度には 36.64% と大幅に低下し続けた。その後， 2011 年度にやや持ち直して 39.94% になっている。 1， 4，及び 5 科目は， 1991 年度から 2011 年度まで低い水準で安定的に推移している。また，2 科目は， 1991 年度の 17.85% から 1996 年度に 28.02% まで大きく上昇し， 2001 年度までこれとほぼ同じ水準で推移したが，その後低下して， 2011 年度には 1991 年度とほぼ同じ水準の 8.18% に戻っている。最後に，0 科目は， 1991 年度の 10.64% から上昇し続けて， 2006 年度には 38.21% にまでなった。特に 2001 年度の段階で 23.85% であり，ここから 2006 年度までの 5 年間におよそ 15% も上昇している。その後は減少の傾向にあり， 2011 年度には 34.10% となっている。従って，大雑把には，この 21 年間，私立大学の個別学力試験の科目数は，0 科目と 3 科目がお互いの変化を吸収する形で推移して来たことになる。

3.3 非学力型選抜

本小節では，センター試験と個別学力試験の科目数が共に 0 である選抜の割合と，小論文及び面接の利用状況の推移を見る。便宜的にこれらを非学力型選抜という言葉で括ったが，この言葉を別の意味で使うことや，本小節の検討対象を別の言葉で呼ぶことも，分析者によってもちろんあり得る。小論文と面接については，選抜方式にこれらが含まれている選抜の割合であり，小論文または面接のみによる選抜の割合ではない。結果は図 7 から 9 に示されている。国立大学の定員の総数のうち，小論文が課される選抜の定員の割合は， 1991 年度から 2006 年度までの 16 年間，20%弱の水準でほぼ一定であった。例えば， 1991 年度は 19.94% ， 2006 年度は 18.15% である。しかし， 2011 年度に

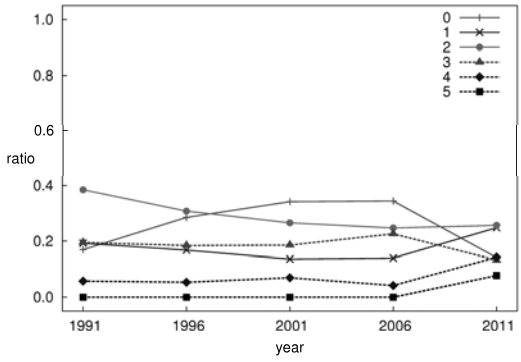

図4 個別学力試験の科目数の推移（国立）

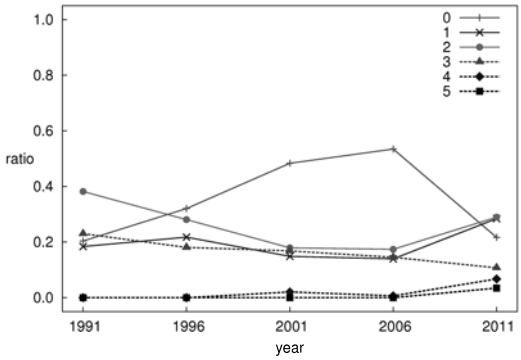

図5 個別学力試験の科目数の推移（公立）

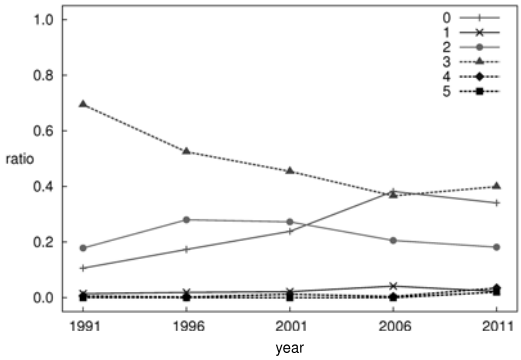

図6 個別学力試験の科目数の推移（私立）

7.28% まで急激に低下している。次に，面接が課される選抜は， 1991 年度の 9.25% から 2006 年度の 21.99% まで 16 年間で 2 倍以上の水準に上昇した。しかし， 2011 年度に 11.75% まで大きく低下し， 5 年間で 1991 年度に近い水準に戻っている。最後に，学力

試験が課されない方式で選抜される定員の割合は，1991 年度から 2011 年度までの 21 年間一貫して上昇している。1991 年度には 3.07%に過ぎなかったが，2001 年度に 10.45% まで大きく上昇し，2011 年度には 12.95% になっている。

次に，公立大学についてであるが，小論文が課される選抜の定員の割合は，1991 年度の 19.90% から 2006 年度の 38.37% まで，16 年間で 2 倍に近い水準にまで上昇した。その後，2011 年度に 1991 年度の水準をはるかに下回る 13.85% まで急激に低下している。公立大学の選抜方式の科目数は，国立大学と似た推移を示すことが多かったが，小論文は全く異なる挙動を示している。次に，面接が課される選抜の定員の割合は，1991 年度から 1996 年度まで約13%で一定であったが，その後 2006 年度までの 11 年間で 30.85% と 2 倍以上の水準に上昇した。しかし，2011 年度に 16.02% まで大きく低下し，1991 年度から 1996 年度に近い水準になっている。学力試験が課されない選抜の定員の割合は，1991 年度の 7.28%から 1996 年度の 12.64%，2001 年度の 16.98% を経て，2006 年度の 20.88% まで上昇し続けたが，2011 年度に 19.75% となり，下降あるいは横ばいに転じている。

最後に，私立大学について見る。まず，小論文は，国公立大学と異なり，この 21 年間に大きな上昇や低下を示すことなく，10%前後の水準で比較的安定的に推移して来た。1991 年度の 10.54% から 2001 年度の 11.47% を経て，2011 年度は7.28%である。面接は，やや振り幅が大きいものの，小論文と似た変化を示しており，20%前後の水準で推移している。最も割合が低かったのは 1996 年度の 14.39% であり，高かったのは 2006 年度の 23.16% である。学力試験が課されない選抜の定員の割合は，1991 年度の 10.54% から 1996 年度の 15.40%，2001 年度の 18.72% を経て，2006 年度の 26.98% まで 16 年間上昇し続けたが，2011 年度に下降に転じて，23.28% になっている。

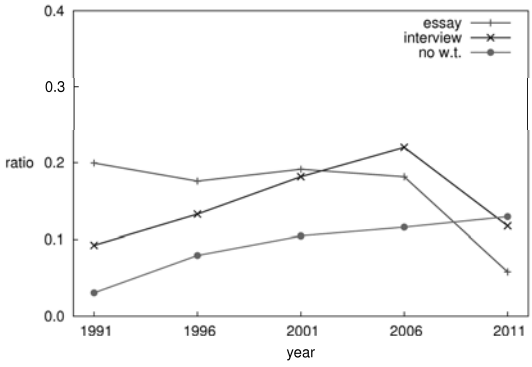

図7 非学力型選抜の動向（国立）

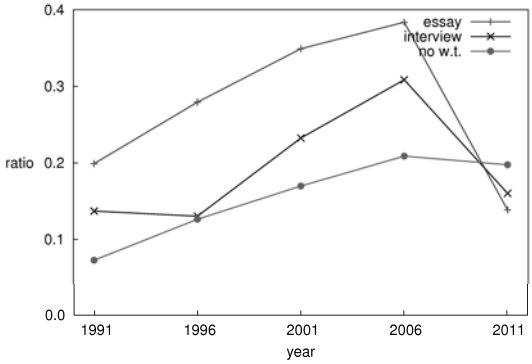

図8 非学力型選抜の動向（公立）

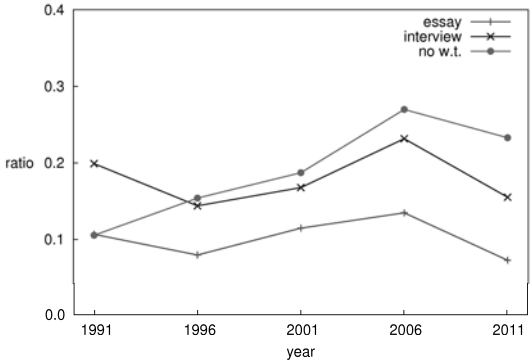

図9 非学力型選抜の動向（私立）

4 まとめ

表2に学力を中心とした選抜方式の推移の特徴が抽出されている。まず国立大学について見ると，センター試験5科目以上と個別学力試験の結果からは，2001年度あるいは2006年度の頃までは科目数の減少傾向，それ以降には増加傾向が見られるのに対し，センター試験0科目，及びセンター試験と個別学力試験が共に0科目の結果はこれと反するものになっており，2極化の傾向が見られる。次に公立大学については，センター試験0科目，個別学力試験，及びセンター試験と個別学力試験が共に0科目の結果から，2006年度の頃までは科目数の減少傾向，それ以降には増加傾向が見られる。最後に私立大学についてであるが，センター試験の結果から，徐々に利用は拡大しているものの，依然として，センター試験を利用した選抜方式の定員の全定員に占める割合は，それほど大きくないことが分かる。また，個別学力試験の結果，及びセンター試験と個別学力試験が共に0科目の結果から，公立大学と同様に，2006年度の頃までは科目数の減少傾向，それ以降には増加傾向が見られる。

次に，小論文と面接に関する結果を，これらの選抜方式がこの21年間で普及したかという点からまとめる。国公立大学については，2011年度の小論文または面接が課される選抜の定員の割合は，1991年度とほぼ同じ水準か，またはそれを下回る水準となっている。私立大学については，この21年間，多少の変動を経験しながらも，小論文が10%前後，面接が20%前後で推移して来た。以上をまとめると，小論文と面接は広く使われた時期があったものの，これらの利用はあまり拡大していないと言える。

一般に，日本では，1980年代の後半から大学入試の多様化が進展してきたと考えられている。入試の多様化は，1990年代には，例えばそれが過熱した受験競争を冷却しているのかといった文脈で（天野，1992），現在では，例えば全入時代の入学者選抜の課題（先崎，2008; 近藤，2009）といった文脈で論じられ，議論される際の文脈は変化しているが，長期間に渡り大学入試研究における1つのキーワードであり続けている。「入学者選抜の多様化をより一層推進することが大切」（文部省高等教育局大学課大学入試室，

表2 入学者選抜方式の推移の特徴

センター試験	
国立	0科目：1991-2011 一貫して微増 5科目以上：1991-2001 減少，2001-2011 増加
公立	0科目：1991-2006 微増 5科目以上：1991-1996 大幅減少，2001-2011 増加
私立	0科目：1991-2011 一貫して微減 1-4科目と5科目以上：全体的に微増
個別学力試験	
国立	0科目：1991-2001 増加，2006-2011 大幅減少 4科目と5科目以上：2006-2011 増加
公立	0科目：1991-2006 増加，2006-2011 大幅減少 4科目と5科目以上：2006-2011 増加あるいは微増
私立	0科目：1991-2006 増加，2006-2011 減少 3科目：1991-2006 減少，2006-2011 増加
センター＝0かつ個別＝0	
国立	1991-2011 一貫して増加
公立	1991-2006 増加，2006-2011 微減
私立	1991-2006 増加，2006-2011 減少

1996 ）であるという主張が 1990 年代から今日までしばしばなされてきたが，山村（ 2009 ）などによって，果たして入試の多様化は成功しているのかが，近年改めて問われている。本稿では， 1991 年度から 2011 年度までの 21 年間に全国大学の入学者選抜方式がどのように推移して来たのか，また現状はどのようなのかを定量的に調べたが，第１節で述べたように，この調査は，入学者選抜で必要とされることを明らかにし，入試をより良くするために望まれることをスタンダードとしてまとめることを目指した入試スタンダード・プロジェクトの基礎研究として行われたものである。今後は，本調査の結果を活かして，大学入試のガイドラインの作成に取り組んでいきたいと考えている。

参考文献

天野郁夫 (1992). 「大学入学者選抜論」『 IDE 現代の高等教育』， 9 月号，5-12.

伊藤圭 (2006). 「大学入試における総合試験および適性試験の動向」『大学入試研究ジャーナル』， **16** ， 149-155.

近藤治 (2009). 「多様化する大学入試とその課題」『工学教育』， **57** ， 10-14.

晶文社学校案内編集部 (2010). 『全国大学受験案内 2011 年度用』晶文社 .

晶文社出版編集部 (1990). 『全国大学受験案内 '91 年度用』晶文社 .

晶文社出版編集部 (1995). 『全国大学受験案内 '96 年度用』晶文社 .

晶文社出版編集部 (2000). 『全国大学受験案内 2001 年度用』晶文社 .

晶文社出版編集部 (2005). 『全国大学受験案内 2006 年度用』晶文社 .

滝紀子 (2000). 「入学者選抜多様化の現状と問題点」『 IDE 現代の高等教育』， 3 月号，30-35.

中村高康 (1997). 「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究―選抜方法多様化の社会学的分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』， **37** ， 77-89.

西井泰彦 (2007). 「全入時代と私大経営」『 IDE 現代の高等教育』， 6 月号，27-35.

野家彰 (2000). 「大学入学者選抜の現状（資料）」『 IDE 現代の高等教育』， 3 月号，63-71.

文部省高等教育局大学課大学入試室 (1996). 「大学入試の多様化と新教育課程入試」『大学と学生』， **368**， 28-36.

先崎卓歩 (2008). 「高大接続の現状課題―「大学全入」時代の学力把握と選抜」『大学と学生』， **61** ， 48-57.

山村滋 (2009). 「多様な大学入学者選抜方法の実態分析」山村滋ほか『学生の学習状況からみる高大接続問題』大学入試センター研究開発部， 81-109.